

「中央公論」7月号

永井陽之助  
『現代と戦略』  
興奮を誘うポレミックな政治的リアリズム

●中嶋嶺雄

永井氏の『現代と戦略』は、とかく軍事機密のどことなくうさんくさい、それでいて硝煙の臭いだけが残りといった一般の戦略物とは決定的に異なり、読者を魅了してやまない政治的英知と歴史の教訓が見事に結実した啓蒙作品である。本書が「文春読者賞」を得たことにも示されているように、今回の著書において〈永井政治学〉は、エリートのための華麗な修辭学・歴史哲学から大衆のための政治外交論へと初めて転化したといえよう。だが同時に、〈永井政治学〉がこのような大衆的基盤をもったということは、著者をして一種の知的アジテーターたらしめている感もあり、著者自身が戦略論や地政学のもつ独特のエクスタシーのなかに自己陶醉しているかのようだ。

もとより、この点にこそ本書の魅力があるのだが、それにしても本書はまた、きわめて

論争的な書でもある。『文藝春秋』連載時の順序とは違つて、冒頭からベストセラー「戦略的思考とは何か」(中公新書、一九八三年)の著者・岡崎久彦氏(前外務省情報調査局長、現駐サウジアラビア大使)への激しい批判が展開されているのだ。

こうして、岡崎氏に代表される「軍事的リアリスト」の危険な防衛戦略構想を糾弾することが本書の一つの柱になっているのだが、もしも読者が岡崎氏の著書と冷静に読み比べるならば、「古来の戦略論というものは、どうしても軍事戦略に偏りがちで、リデル・ハートのいう『大戦略』、つまり国家戦略の参考となるものは多くない」と述べ、軍事論よりも外交史に多大の頁を割いている岡崎氏が、果たして永井氏がこれほど激しい批判の対象とすべき「軍事的リアリスト」なのかという問題にまず逢着するのではないか。もと

より、今日のわが国には、様々なレヴェルの「軍事的リアリスト」、つまり防衛力増強論者や核武装論者が存在する。そのことへの永井氏の危惧にかんしては私も同感であり、「非核・軽武装・経済大国」という、吉田ドクトリンがわが国の生存の戦略であるべきだという本書の基調についても共鳴するのだが、今回の永井氏岡崎論争は、あえて言葉を探せば、きわめて「論壇的」な論争・対立なのでもあって、この点をぬきにして本書を論ずることはできないであろう。

この点を顧みることは、また同時に、そもそも両者の「対決」と思われた本誌上の討論(「何が戦略的リアリズムか」本誌一九八四年七月号)で永井氏が「岡崎さんは、自主防衛論者とか、フアナティックなゴリスストとかいう論者と交流し、かれらを教育する義務がある。ほくら政治的リアリストのほうは、非武装中

文藝春秋 1500円



# BOOKS

時代は十三世紀の四〇年代に設定されている。「パリのノートル・ダムは大分出来た」。「ランスもアミアンも手をつけたばかりだ」。

## 堀田善衛 『路上の人』 中世の僧院の不気味さ

立、理想主義者との対話、交流を深めていくことが大事だ。そのためには、岡崎さんとぼくとは、ある点で、一致した共通の基盤をもつからといっても、あくまでも対決していなければならない。これは楽屋裏のオチになつてしまふけど、対決してることが必要なんです」と発言し、はからずも永井⇨岡崎論争の背景を示唆していたことのカギを解くことにもなる。

私は日頃、永井氏の著作に学び、その嚙咳に接する光栄に浴している者であるが、永井氏ほどの偉大な知性にして、しばしば孤独であることをよく知っている。いや福田恆存氏にしても清水幾太郎氏にしても、あるいは優秀なお弟子の多い猪木正道氏にしても、とき

には孤独だといえよう。

そのような永井氏が一年間、米国ハーバード大学に滞在された期間は、わが国でも清水、福田、猪木氏らのあいだで防衛論争が丁発止とたたかわされるなど、論壇的、話題の多い時期であった。この間、そもそも『文藝春秋』に連載された岡崎論文が中公新書として刊行されたことも刺激的であつたが、その好評は、中央公論社を舞台にして数々の秀れた業績を相次いで世に問われた永井氏をして、海の向うで瞠目させるとともに、あるいは氏の孤独感を増幅させたのかもしれない。

そのような時期に安全保障にかんする日本の論壇をめぐるアメリカ学界での論議が起こつたり、永井氏ら「政治的リアリスト」(著者に

### ●渡邊昌美

「ケルンはまだまだ、ストラスブールは半分くらいだ」という噂が路上を流れている(第五章)だけではない。この必ずしもストーリーに重きを置いたとは思えない作品の、それ

よって私もその一人に分類されている)への「軍事的リアリスト」の挑戦と思われる様々な兆候が見られたこと、その他の事情もあつた。永井氏の岡崎批判は当初からやや興奮した筆致ですすめられたともいえよう。そこへもつてきて『朝日ジャーナル』が「永井⇨岡崎論争」は永井の勝ち、「岡崎色は省内から否定された」などという推測を書いたため(「外交青書は外務省の論客岡崎久彦氏の敗北宣言だ」、『朝日ジャーナル』一九八四年十月二十六日号)、両者の論争は、ますます論壇的、た

らざるを得なかつた。いずれにせよ、話題に事欠かない著作であるが、本書はいま、多くの読者に食うように迎えられる、好評を博している。(国際関係論)

新潮社 1600円



でも次第にストーリーの盛上ってくるあたり(第七章に、「今年はキリスト様の紀元で何年ですかい?」。「一二三三年だ。それがどうした?」)とある。そして、大詰は南フランス、